【歴史から未来へ導く】

「錦江町と桜島」

～大正噴火99年の歴史を振り返る②～

今月は、「桜島爆発の日」「大根占町誌」「田代町誌」からの情報をもとに制作しました。

「地震は桜島の噴火に関係なし」

大正3年1月12日

桜島の黒神集落では、十二日の早朝あたりまで、村の人口の約八割近くの千五百人がまだ残留していました。十一日の夕刻までは測候所からの、「連日の地震は桜島の噴火に関係なし」の発表を半信半疑で様子をみていた村人達も、十二日の午前三時頃からの上下動地震と地鳴りには、家の中にいたたまれず、夜明けとともに避難準備をすませ海岸に集まり、数カ所でたき火をして海岸はごったがえしていました。

そこへ黒神村の氏神様である原五社の図師という神主から、神のお告げだと若い青年が走って来て「桜島が噴火する」との掛がでたことを海岸の人々に伝えたのです。これを聞いた海岸では大騒ぎとなり、一刻も早く島を逃げ出すことになりました。

当時、黒神には六～七トンの貨物船が五隻いました。その際、船主として大型船を指揮していたのが桜原自治会への移住者でもある新村金畩さんです。

一月十二日の午前七時頃から、避難民を一杯に積み込んだ船は牛根を目指して次々に出港していきました。

大正大爆発は山腹の火口2か所で起こった。火口のすぐ近くからの写真で、必死の撮影だったと思われる。　南日本新聞（昭和52年11月6日掲載）

それでも黒神には七百人ぐらいの避難民が残っていました。

午前十時五分、桜島が大爆発

爆発直後の黒神の浜辺はあたかも地獄絵図さながらで、残された避難民の一人一人は、自分が逃げることで精一杯だったのです。大爆発が起き間もなく、熱をもった軽石や砂利が雨あられのように降り始め、黒神集落全体、夕暮れのように暗くなりました。

避難する島民　南日本新聞（昭和55年10月14日掲載）

軽石の中には人の頭より大きいものもあり、これらの軽石が集落のかやぶきの家に命中すると、その熱で出火し、次から次へと延焼していきました。

このような軽石と砂利が人間に命中すると、大きなものであれば即死、小さなものでも怪我は免れない。また、小さな砂利でも直接皮膚にあたると、針で刺すように痛かったそうです。

次号では、桜島と移住者の様子について歩んで見ようと思います。

錦江町の歴史や言い伝え、昔の遊びや行事など、特集を組んで取り上げていきたいと思います。町史や各資料より調べ掲載していきますが、掲載した内容と違う見解の資料などありましたら、錦江町役場企画課広報へご連絡下さい。錦江町の歴史や文化をひも解き、観光や地域づくりに繋げていきたいと思います。また、個人でお持ちの歴史的資料や写真、言い伝えなどありましたら、取材や調査にいきたいと思いますのでご連絡下さい。

【問い合わせ先】　錦江町役場 企画課　TEL 0994-22-3032